



新聞が伝える情報を考える

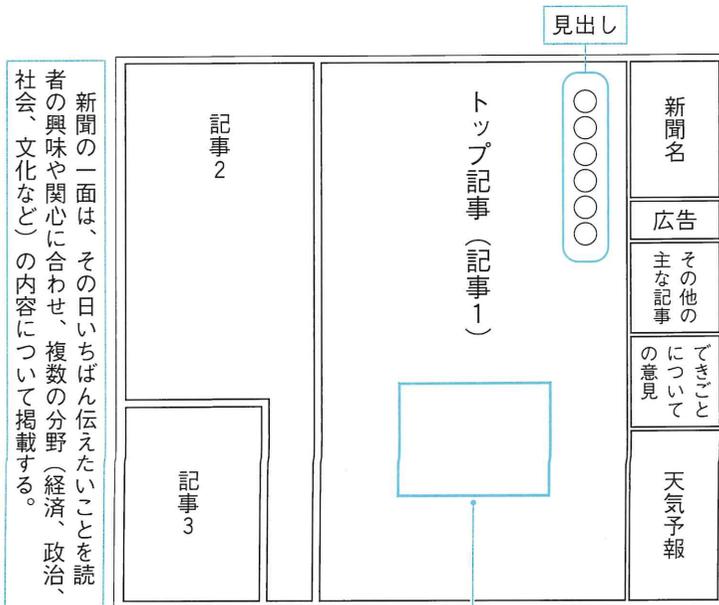
新聞は、世の中の新しいできごとについての見聞を、多くの人に伝え広めるものです。たくさん情報が列挙されるため、読者が負担なく新しい情報を一覧したり、詳しく読んだりできるように、記事には「見出し」や「リード文」、写真や図表も含まれ、文字の大きさや配置の工夫などがなされています。

同じできごとでも、新聞によってできごとの伝え方が変わります。読者は、記事の工夫のされ方を吟味^{ぎんみ}することで、記事が信頼できるものであるかどうかを考えることができます。新聞社としての意見や主張がはっきり書かれる「社説」を例に、複数の新聞記事を比べ、できごとの伝え方の違いを考えてみましょう。

10

5

■新聞の一面の記事の配置例



写真や図表などの資料を使い、読者の理解を助けるようにする。

紙面にある情報の種類や構成を確認する



「△△新聞 朝刊」の一面（2022年12月7日付）

- ①上の紙面は、ある日の新聞の一面です。その日で最も重要と判断した記事である、「トップ記事」の扱いを確かめましょう。
- ②新聞の紙面には、どのような内容や種類の情報が載っているか、確かめましょう。

新聞の一面は、雑誌の表紙と同様、その日の新聞が中心的に扱う記事によって構成され、編集されています。実際の紙面の例では、トップ記事（記事1）と記事2の配置は、新聞社が考えた、その日の記事の中の、重要度の順序です。トップ記事は、最も重要度が高いと判断された記事です。

大きな文字の見出しや、写真の掲載は、記事の位置にかかわらず、最も読者の注意を引く記事になります。

社説を比較する

サッカーW杯 変わる世界の勢力図

下馬評を覆す意外性と強豪の多様化。その醍醐味と妙味を感じさせながら、4年に一度のサッカーW杯は、後半を迎えた。

前半は、「一番狂わせ」が続いた。1次リーグで、過去優勝4回のドイツ、2回のウルグアイや、前回3位のベルギーが敗退した。異例の11月開幕で各国の調整不足もあったかもしれないが、実力拮抗の証だろう。

特に活躍が目立ったのは、アジアやアフリカ勢だ。サウジアラビアが初戦で優勝候補の一角を占めるアルゼンチンに逆転勝ち。韓国、豪州、日本は決勝トーナメントへ進んだ。アジア枠3チームの進出は過去に例がない。アフリカ勢では、モロッコが1位で通過。カメルーンが優勝候補最右翼のブラジルに競り勝ちなど、勢力図の変化を印象付けた。

なかでもドイツ、スペインを逆転で下した日本は、8強に届かなかったとはいえ、大会前半で最大の「驚き」だった。

サッカーは、歴史的な土壌の上に選手も資金も集中する欧州が中心で、そこに、名選手を多く出す中南米が割り込む形で進んできた。アジア勢は66年大会で北朝鮮が8強、02年大会では地元開催の韓国が4強へ進んだが、1次リーグで大差をつけられることも珍しくなかった。

「社説」は、新聞社が、重要なできごとについて自社の意見を述べるものです。次のような点について、二つの新聞の社説を読み、それぞれの社説の内容や特徴を捉えましょう。

- ・どのような観点からできごとを見ているでしょうか。
- ・どのような課題を提示しているでしょうか。
- ・できごとに対してどのように評価しているでしょうか。

勢力図の変化は、医科学を活用したデータ解析や練習方法が普遍化したことに加え、国境を越えて活躍する実力派指導者の存在が大きい。かつて欧州と中南米でとりあった開催地が、94年米国、02年日韓、10年南アフリカ、そして今回の中東と広がった影響も見逃せない。

戦後の日本サッカーはドイツの故デットマール・クラマーさんによって確ができた。技術を学び、リーグ創設やコーチ育成といった制度作りまで指南を受けた。先進的な人材育成制度を持つ近年のスペインからは、ジュニア選手や指導者の人材交流を中心に多くを学んだ。両国へのいわば「恩返し」として、2勝の意義は深い。

今回の日本代表は26人の総員態勢で臨む姿が際立った。その大半が海外クラブの所属か経験者で、強豪への気後れはない。過去3度の1次リーグ突破では心身の疲労による限界も見えたが、層の厚さと経験値を上げた今回の姿は「新しい日本代表」と呼べる進化があった。

W杯出場を目標にプロのJリーグを立ち上げてから30年がかりの現在地である。選手強化にとどまらず、地域密着を掲げ、環境作りに取り組んできた。それぞれに浮沈があり、失敗もあるが、長期的な時間軸を定め、ぶれることなく進む姿勢には、他の競技が学ぶヒントも多いように思われる。

W杯日本敗退 新時代の扉を開いた選手たち

悲願の8強入りはかなわなかったが、世界の強豪を相次いで打ち破った「森保ジャパン」の奮闘は、日本のサッカー史に確かな足跡を残した。

サッカーのワールドカップ（W杯）カタール大会の決勝トーナメント1回戦で、日本はPK戦の末、クロアチアに敗れた。

前田大然選手がゴール前のこぼれ球を押し込んで前半に先制点を奪った。しかし、後半に追いつかれ、1対1のまま延長戦でも決着がつかなかった。

前回ロシア大会で準優勝した東欧の雄を相手に、果敢に攻めてゴールを何度も脅かした。吉田麻也選手ら守備陣は、体を張って体格の大きい選手と渡り合った。

8強への挑戦は4度目だった。世界の壁は厚かったと言わざるを得ない。ただ、延長戦を含めて120分に及ぶ死闘の末、PK戦という僅差での敗戦だ。選手たちは胸を張って帰国してほしい。

日本は今大会、過去のW杯で優勝したドイツ、スペインを相手に、いずれも2対1の逆転勝ちを収めて16強に入った。テレビなどの中継を見て、手に汗を握り、声援を送った人も多いはずだ。

二つの大金庫を挙げた試合ではそれぞれ布陣を変更して前半の猛攻に耐

え、後半から攻撃力のある選手を前線に投入して少ないチャンスをものにした。

今大会では、新型コロナウィルスの影響で、各国の代表選手枠が23人から26人となり、試合中の交代枠も増えた。厚い選手層を生かして、この交代枠を積極活用し、ここぞという時に起用する作戦が奏功したと言えよう。

日本から雄飛し、海外のチームで活躍する選手が増えている。初出場の1998年フランス大会では一人もいなかったが、今回は大半がドイツやスペインなど欧州のクラブに所属している。

森保一監督は敗退後、「世界に勝っていけるという『新時代』を見せてくれた」と選手を称えた。海外で技術力や精神力を磨いた選手たちが、世界で戦えるレベルになったことを証明してみせた。

今大会は、日本と韓国、豪州のアジア勢3か国が16強入りを果たした。世界のサッカー界をリードしてきた欧州や南米との実力差は縮まりつつあるのではないか。

カタールは、94年米国大会のアジア最終予選で、日本が涙をのんだ「ドーハの悲劇」の舞台だ。日本サッカーはそれから飛躍的な進化を遂げた。今回の活躍は、サッカー選手を目指す子どもたちにも大きな夢を与えたことだろう。

二つの社説を読み、共感できた点、あるいは異なる意見をもった点を取り上げ、文章にまとめましょう。

- ・二つの社説を読み比べ、共通して取り上げている内容や、独自に取り上げている内容について、どちらの表現や取り上げ方が効果的かを説明しましょう。
- ・最後に、自分の意見をまとめましょう。

振り返り

- メディア・リテラシーについて知り、新聞を構成する情報を整理し、情報の信頼性の確かめ方を考えているか。
- メディアの特性や課題を踏まえ、複数の社説を批判的に読み、新聞社としての意見や主張について考えているか。
- 新聞の構成や、複数の新聞からの情報を捉えることで、メディア・リテラシーへの関心を広げよう。